

サン＝テグジュペリ論 I

山 本 和 道

I. はじめに

サン＝テグジュペリ (1900 - 1944) の文学作品『南方郵便機』(1929)、『夜間飛行』(1931)、『人間の土地』(1939)、『戦う操縦士』(1942)、『ある人質への手紙』(1943)、及び彼の伝記的事実は彼の文学作品『星の王子さま』(1943) とどのように関係しているのかという問題を検討しながら、『星の王子さま』の世界を探究することにする。

『星の王子さま』は、ユダヤ人で22歳も年上の友人レオン・ウェルトに捧げられている。「ほくは、この本をある大人の人に捧げたことを子供たちにわびたいと思います。でも、ほくには、こうする真面目な理由があるのです。それは、この大人の人がほくの第一の親友ということです。また、他にも理由があります。それは、この大人の人が、どんなことでも、子供のための本でさえも理解できるということです。そして、三つ目の理由は、この大人の人が今フランスに住んでいて、お腹をすかし寒い思いをしていることです。その人は、本当に慰めてあげる必要があるのです。これらの理由で十分でないなら、ほくは、昔子供だった頃のその人に捧げたいと思います。大人は皆、初めは子供でした。(しかし、大人でそのことに心をとめている人は殆どいません)それで、ほくは、次のようにほくの献辞を書き換えることにします」¹⁾ 自分の作品をレオン・ウェルトに捧げる理由を述べ、最後には「小さな男の子だった頃のレオン・ウェルト」に献辞を修正することを告げるこの文章を読んで思うことは、大人と子供が異質な存在として分類されているのではないかということである。また、この本は、子供のための本なのだろうかという疑問も生じる。子供のための本ではあるが、子供のための本も理解できる大人のための本でもあるようだ。それでも、子供の心を忘れた大人たちがこの本を読むことは求められているのだろうかという問題が残る。

献辞に次ぐ冒頭部において、語り手は、6歳の時、ゾウをボアが飲み込んだ絵を描いたが大

人の人たちは理解しなかった、それでボアの内部が見える絵を描いて大人の人たちに見せたら、大人の人たちはボアの絵は止めにして地理と歴史と計算と文法に興味を持ちなさいと言ったので、画家という素晴らしい職業は諦めたと述べている。大人と子供では記号を解読するためのコードが異なるというのであろうか、大人の人たちにはいつも説明をしてあげなければならぬと嘆いている。

このように、この作品では、最初から「大人の世界」と「子供の世界」を対立させ、「子供の世界」を優位に置こうという姿勢が示されている。

Ⅱ.『南方郵便機』、『夜間飛行』、『人間の土地』、『戦う操縦士』における「子供の世界」

『星の王子さま』の検討に入る前に、この作品よりも前に書かれた作品を概観し、そこで「子供」、「子供の世界」がどのように表現されているかを見ることにする。

『南方郵便機』においては、中継基地キャップ・ジュビーで語り手は、無線を使って、トゥールーズを出発しダカールへと向かう、子供の頃からの友人ベルニスの飛行を追っている。その過程で、二人の共通の幼友達ジュヌヴィエーヴとベルニスの2か月前の再会、「子供の頃」の回想、ジュヌヴィエーヴの家庭のこと、ベルニスとジュヌヴィエーヴの駆け落ち、再度の「子供時代」の回想、ベルニスがトゥールーズの飛行場へ向かう途中でジュヌヴィエーヴの屋敷に立ち寄ること、そこでの二人の関係の最終的な破綻、サハラ砂漠でベルニスを迎えた年老いた軍曹のことなどが語られて行く。

ベルニスは、空を飛びながらも地上の生活が気に掛かっている。「なんと整然とした世界でもあるのだろう——高度三千メートル。羊たちが箱に入っているように整然としている。家、運河、街道、人間の玩具。分割された世界、タイルを張ったような世界。そこでは、どの畑も生垣と隣接し、公園は塀と隣接している。どの小間物屋の女主も自分の祖母と同じ生活をしているカルカソンヌ。囲いの中のささやかな幸福」²⁾ ここには、死と隣り合わせの「空の世界」と異なった、安定した生活への反発とともに郷愁が存在する。さらに、ベルニスは、眼前の空間に「住居」を見る。飛行の中に「住まう」感覚が入って来ている。「とても明るい風景の上に琥珀色の光だ。しっかりかきならされた畑と牧場。右に落ち着いた感じの村が一つ、左にはとても小さな羊の群。そして、それを囲っている青い空のヴォールト。ベルニスは「一軒の家だ」と思う。この風景、この空、この大地が、一つの住居のように建てられていることを突然はっきりと感じたことを覚えている。整頓の行き届いた、親しい住居だ。どんなものもしっかりと垂直の状態におさまっていた。統一されたこの光景に脅威や裂け目は全く存在しない。彼は、この風景の内部にいるような気がしていた」³⁾ このように、ベルニスは、空を飛ぶという行為の中で、地上の「住まう」生活を思い、その二つの異質なものを統合したいという意識を持っている。ただ、「住まう」ことへの志向は、現在の地上の生活ではなく「子供時代」に起因して

いた。語り手は、「子供の頃」のジュヌヴィエーヴについて次のように語っている。「あなたは、あの家とその周りの大地のあの生きた衣によって、がっちりと守られていた。あなたは、菩提樹や樅や動物たちと多くの協定を結んでいたのです、ぼくたちは、あなたをそれらの物の王女さまと呼んでいた」⁴⁾ 少女時代のジュヌヴィエーヴは、家や庭園と同化した存在であった。彼女にとって「住まう」者であったのである。飛行士として「空の世界」に生きるベルニスは、既に人妻となったジュヌヴィエーヴと再会し、語り手への手紙で「ぼくは、泉を再び見つけ出した。覚えているか。ジュヌヴィエーヴだよ」⁵⁾ と書いている。これは、彼女を介して屋敷や庭園と融和した生活に回帰したいという意識に基づいていたと見なすことができる。

ジュヌヴィエーヴは、子供が病死し夫との関係が破綻したので、ベルニスのもとに走る。ベルニスは、空を飛ぶ飛行機ではなく地上を走る車でジュヌヴィエーヴとパリから逃げ出す。ところが、ベルニスが運転する車の調子が悪くなるのと平行して、彼女の体調も悪くなる。そして、二人の関係もおかしくなっていく。ジュヌヴィエーヴが、自分が住んでいた邸宅と自分が今いるホテルの違いに当惑することになる。ジュヌヴィエーヴは、長い時間の蓄積の重みを持つ、家や家具と結び付いており、それから離れると、自分ではなくなるのである。自分の邸宅から連れ去られたジュヌヴィエーヴは、ジュヌヴィエーヴではなかった。彼女は、「住まう」存在だったが、どこにでも住むことができる存在ではないことがはっきりする。ジュヌヴィエーヴとの関係を通して、「子供時代」に回帰しようという、ベルニスの試みは失敗する。ベルニスは、「子供時代」のように庭園や屋敷と調和した生活に戻ることはできなかった。彼は、「空の世界」で生きるしかないのである。そのような彼に、「住居」の中を飛ぶという感覚は、もう現われない。

結局、彼においては、「子供時代」を過ごした屋敷に起源を持つ「住居」への思いと飛ぶという行動は両立しなかった。

『南方郵便機』は、サン＝テグジュペリに地上の仕事を強要し空を飛ぶことを放棄させたのに結局婚約を破棄したルイズ・ド・ヴィルモランとの恋愛体験と、その方面における無能ぶりを発揮した、瓦・タイル製造販売工場での事務員生活やトラック販売会社でのセールスマン生活の影響を色濃く受けている作品であり、「地上の世界」と「空の世界」を対比させ、「空の世界」を優位に置くというふうに構成されている。しかし、その「空の世界」は、「子供時代」との関係性を断たれてしまった。

この作品では、ジュヌヴィエーヴの子供は、病気であることと死亡したことが告げられるだけで、作中人物として直接描出されるに至っておらず、大人が「子供時代」の良き物を獲得する手助けをすることはできなかった。それどころか、この子供は、ジュヌヴィエーヴとベルニスを死へと誘うということにもなっている。この小説は無線の報告で終わっているが、それに「近くに敵の集団。操縦士は死亡、飛行機解体」とある。ベルニスは、賊の攻撃によるか飛行機事故で死んだのであろう。ベルニスの死の意味を明解に読み取ることは困難であるが、「子

供時代」への回帰の道が断たれたことも、彼の死に幾分影を落としているかのようである。

『夜間飛行』では、飛行機の性能が低い時代に夜間飛行という非常に危険な任務に従事する人々の苦闘を描く。一夜の10時間足らずの出来事であり、時間の経過に従って各場面の各作中人物の行動と心理が報告されて行く。チリ便、パラグアイ便、パタゴニア便の三つの便がブエノスアイレスに向かっており、その基地では、鉄の意志を持つ、全路線網の責任者リヴィエールが指揮を取っている。彼は、部下に鉄の規律を課す。彼は、日常生活に存する個人的幸福を超えるものを探求している。「彼は、何の名において、彼らを個人的幸福から引き離したのか。第一の掟は、それらの幸福を守ってやることではないのか。それなのに、彼自身がそれらの幸福を壊してしまう。それでも、いつか、宿命的に、それらの黄金の聖域は、蜃気楼のように消え失せることになるのだ。彼よりももっと冷酷な老いと死が、それらの幸福を破壊するのである。たぶん、もっと長続きする、救うべき他のものが何か存在する。リヴィエールは、たぶん、人間のその部分を救おうと努めているのだ。そうでないならば、行動が正当化されることはない」⁶⁾

パタゴニア便のパイロットのファビアンが、サイクロンと遭遇し格闘するが、自然の力には敵わなかった。リヴィエールは、それに対して鉄の意志で対処し、搜索活動は後回しにしてヨーロッパ便との接続という郵便配達業務を続行する。「空の世界」の業務に対して、ファビアンとその妻の「地上の日常生活」や夫の遭難に対する妻の感情も描かれている。しかし、ファビアンの妻は、夫の遭難に際して、夫がどうなっているのかをリヴィエールに聞きに行った時、以下のような気持ちに囚われることになる。「彼女は、自分の内に湧き上がって来る、熱烈なので殆ど野性的になっている愛、献身のすべてが、ここでは、迷惑で利己的なものに見えるような気がした。彼女は、できるものなら逃げ出したかった」⁷⁾

この作品においても、「地上の世界」よりも「空の世界」が重要視されている。『南方郵便機』と同様、「空の世界」の行動と「住まう」ことの幸福の二律背反が問題になっているが、強引に前者が肯定されている。厳しい業務に従事する人間の深い部分における連帯が描かれ、「空の世界」の「永遠性」が歌い上げられることになる。「リヴィエールが被った敗北は、たぶん、真の勝利を近づける約束のようなものである。進行している出来事だけが重要なのだ」⁸⁾

この作品には、「子供時代」を思い出す記述は存在しない。ただ、そこには、「子供時代」の庭園や城館の回想は存在しないが、それと深いところで繋がっていると思われる、後に「文明という人間の共同体」と結び付くことになる「僚友からなる共同体」、僚友の連帯は描かれている。また、子供の頃、サン＝テグジュペリが、夜、夢想の国へ旅立ったように、この作品では、飛行士は、夜の夢幻的な空へと飛び立つ。

『人間の土地』は、サン＝テグジュペリが、折に触れて書いたルポルタージュやエッセイを集め、加筆修正を加え、物語の因果関係によるのでも時間や場所が持つ秩序によるのでもなくそれらの文章が持つ内的リズムに従って、並べたものである。この作品は、いわゆる小説では

ないが、作品全体を貫くプロットに変わるものとして、いわば「意識の流れ」が存在しているのである。飛行士として体験したことや近しい人から直接聞いたこと、それについての考察、夢が展開して行く。「子供の頃」の回想も、重要なウエートを占めている。

『人間の土地』で特筆すべきことは、「空の世界」と「地上の世界」が統合されていることであろう。そこでは、『南方郵便機』のペルニスのように「地上の日常生活」に拒絶されることはないし、『夜間飛行』のファビアンやリヴィエールの場合のように「地上の日常生活」を軽視するというものもない。『人間の土地』では、大地から学ぼうという姿勢が存在し、空を飛ぶことは、地上の生活、人間の生活を認識する一つの方法となっている。「飛行機は、確かに一つの機械だが、なんと素晴らしい分析の道具だろう！[……] ぼくたちは、研究の道具を覗いて調べるように、飛行機の円窓の向こうに人間を観察し、宇宙的規模で人間を判断するのだ」⁹⁾ この飛行機に乗って、上空から眺められる、農民、詩人、教員、大王、庭師、指物師、修道僧、科学者、画家などの地上に住む人々の営みを、飛行士のそれと等価なものとして受け入れている。とりわけ、飛行機を「犁のような一つの道具」、飛行することを「耕すこと」と呼び、農民の営みと自分の飛行を同一視している。都会よりも農民の世界の方が重要ということにもなっている。「しかし、飛行機で、人は都市とその会計係を離れる。そして、農民の真実を再び見出すのである」¹⁰⁾。「飛ぶこと」、「耕すこと」という行動のうちに存在する、他と交流する充実した時の内に「真実」を見出そうとしている。

そして、このような飛行機は、「住居」となった。飛行機について、「ぼくたちは、まだ顔を持たないこの新しい家を活気のあるものにしなければならない」¹¹⁾と書かれている。

このように「空の世界」と「地上の世界」が和解するようになったのは、上空から地上を見る体験によるのであるが、それだけではない。砂漠に不時着した時の夢の経験にも起因していると思ふことができる。サハラ砂漠における夢について、「どこかに、黒い樅と菩提樹に覆われた庭園と、ぼくが愛していた古い家があった。その家が遠く離れたところにあるか近くにあるかは、どうでもよいことだった。また、その家が、ここでは夢の役割しか果たすことができなくて、ぼくの肉体を暖めることもぼくを守ることもできなくても、どうでもよかった。夜をその現前でいっぱいにするために、その家が存在しているだけでよかった。ぼくは、もう砂の上で座礁したあの肉体ではなかった。ぼくは、自分の方向を定めていた、その家の子供だった……」¹²⁾と書かれている。その家は、「子供の頃」の家であった。実際に今自分の目の前になくそこに住んでいないからこそ一層光を放つ家が、姿を現わしたのである。「子供時代」の回想では、この他に、家政婦、庭園についてのものもある。大人は、「子供時代」に戻ることはできない。しかし、「子供時代」を回想することが、安らぎと生きる力を与えるということになっている。

『戦う操縦士』は、ドイツ軍の攻撃を受けているアラスの上空への偵察飛行を、『夜間飛行』のように時間の経過に従って読者がその場に立ち会ったような気持ちになるように物語ってい

るが、それに、『人間の土地』のような、回想や考察や夢が介入し、混ざり合っている。まず、偵察飛行を行なっても司令部がどこにあるのか分からないので、偵察飛行で得た情報が司令部に伝わらず、偵察飛行そのものが意味を失っているという状況が説明されている。それで、前半は、フランスの悲惨な現状、生きることが意味がないという意識、未来に希望が持てないことなどが語られて行く。しかし、後半では、「精神の共同体」、「目に見えない構造としての文明」を守らなければならないこと、自己のうちに「個人」ではなく「人間」を住ませべきであること、自分と他者を結ぶ絆のために命を賭けても行動することが重要であることなどが主張されている。

回想は、戦友や基地の生活についてのものもあるが、「少年時代」のものが多い。作品が15歳の時の学院の回想から始まっている程である。現在の地上が絶望的であるので、回想は「子供時代」の地上に向かうのであろう。語り手の操縦士は、「ぼくは、どこの人間なのか？ぼくは、一つの国の人間であるように、子供時代の人間なのだ」¹³⁾ と言う。彼は、高射砲の攻撃の受けると、「子供時代」の家政婦ポーラに語り掛ける。「ポーラ、これは、新しい遊びだよ。右を一蹴り、左を一蹴りして、射撃を逸らすのだ。ぼくは、よく高いところから落ちて、瘤を作ったね。あなたは、確かアルニカチンキの湿布でぼくの瘤の手当をしてくれたんだよね。ぼくは、これからアルニカチンキがすごく必要になるんだ。それでも、ねえ……夕暮れの青い空が素敵だね！」¹⁴⁾ 「ぼく」は、ここにおいてポーラを楯にしている。また、サン＝モーリス・ド・レマンの庭園における「騎士アクランの遊び」も思い出している。敵の一斉射撃を受ける中、「子供時代」を思い出すことで、恐怖感を克服するのである。「子供時代」の回想は生きる力になることが、明確にされている。

飛行機は、『人間の土地』で一種の「住居」になったが、『戦う操縦士』では、母親のような、自分を優しく守ってくれる存在として提示されている。「これは、飛行に入る前は非人間的なものであるように思えた。ところが、今、ぼくは、飛行機自体に授乳されると、飛行機に対して子供が母親に対して感じるような愛情を感じる。乳児が抱くような愛情を」¹⁵⁾

Ⅲ. 『星の王子さま』における、「大人」と「子供」

このように、『星の王子さま』より前に書かれたこれらの作品は、多かれ少なかれ、「子供時代」に起源を持つもの、「子供の頃」の回想が、重要な部分を占めていた。ただ、そこでは、「子供時代」、「子供の世界」は、脇役であった。ところが、『星の王子さま』では、献辞と冒頭部で既に、「子供の世界」が中心に据えられていることを窺うことができる。それに、『星の王子さま』を読み進めば、「子供」が、主人公として登場して来る。以下、この作品において、「子供の世界」は、「大人の世界」との関係においてどのようなものとして表現されているのかという問題を探究することにする。

『南方郵便機』においては、主人公ベルニスの友人を語り手としながらも、その語りに神の視点が入って来るという破格の小説であった。その後、サン＝テグジュペリは、小説の虚構性を排除しようという傾向を強めて行く。『夜間飛行』では、時間の経過に従って各場面の各作中人物の行動と心理を描写して行っており、『人間の土地』では、「意識の流れ」に従って、回想や考察や夢を叙述して行くという方法が取られ、『戦う操縦士』では、操縦士「ぼく」が偵察飛行の状況を語って行くがその中に回想や考察や夢が入って来るというふうに、サン＝テグジュペリは、自分が体験したことと近い人から直接聞いたことしか書きたくない、言葉と行動を一致させたいという自分の志向に合った技法を探究しているが、『星の王子さま』では、『南方郵便機』の後排除しようとしていた虚構性を再び受け入れている。語り手である飛行士は、王子との6年前の出会いと別れを思い出して語るという体裁を取っている。彼は、砂漠に飛行機の故障で不時着して眠っているところを、王子によって起こされて王子と知り合ってから、王子が断片的に語るのを聞いて知ったことと、王子と自分の交友を語って行く。その過程で、「大人」と「子供」があり方の違いが明らかにされる。

「大人」とは、語り手の絵を理解しない大人たちであり、六つの星の住人であり、その六つの星の住人と同じタイプの人間をそれぞれ大量に持つ地球の大人たちであり、王子が転轍手及び丸薬を売る商人と会って知った、自分が何を求めているか分からずあくせくする大人たち、渴きを癒すために費やす時間を節約するために丸薬を飲む大人たちである。それに対して、「子供」とは、列車の窓の外の風景に興味を持ち、人形を大切に作る子供であり、キツネ、王子、語り手の飛行士である。

王子は、「庭師」である。王子は、家より少し大きいくらいの小さな星で、三つの火山の煤払いをし、バラの世話をしていた。また、そのままにしておくと大きくなって星を害することになるバオバブを抜くことにも気を使っていた。

王子のバオバブの話は、一般的には、害になるものは大きくなる前に摘み取ることにしようという教訓として受け止め、色々なことに適応させることができるが、この作品が書かれた時代を考慮すると、そこに、ナチスを手の施しようがなくなるまで放っておいたが、今後はこういうことのないようにしようという教訓を読むことも可能である。

王子は、旅に出る。「住居」でもある自分の星から出て行く。バラとの関係がうまくいかなかったことが原因だ。旅の目的は、友人探しである。

王子は、地球の前に、六つの小さな星を訪れる。

一番目の星の王は、権力者を現わしている。彼の関心事は、命令を下し支配することだけであるが、その命令を叛かれることのないように実行可能なものにする。

二番目の星のうぬぼれ屋は、人から賞賛されることしか考えない、虚栄心や名誉欲の塊のような人間である。

三番目の星の飲み助は、問題を解決しようとせず愚かにも悪循環を続ける人間、意味のない

消費を続けるだけの現実逃避人間である。

四番目の星の実業家は、所有することだけを考えるているが、所有するものを直接手にすることのない人間である。

五番目の星の点燈夫は、機械文明のもとオートメーション作業を強いられる労働者の代表なのであろう。

六番目の星の地理学者は、現実から分離し専門分化した仕事に埋没する人間、人間について考慮しない人間である。

これらの六人のタイプは、それぞれ地球に大量に存在しており、地球の大人の諷刺となっている。近代市民社会、資本主義社会の大人が戯画化され、可笑しみのあるものとして描かれている。

点燈夫の星を除いて、これらの星の訪問を終えた後、「大人って、すごく奇妙だなあ」とか「大人って、全く変だなあ」といった感想を王子が抱くことが示されるが、点燈夫に対しては、そのようなことはない。王子は、「……彼は、ほくが滑稽だと思わないたった一人の人だ」¹⁶⁾と考えている。その理由は、「彼が、自分以外のことに心を砕いている」¹⁶⁾からなのである。

サン＝テグジュペリの他の作品で否定的に描かれている人物としては、『南方郵便機』のジュヌヴィエーヴの夫エルランがいるが、エルランは、他者への効果を考えて、演技をし、そこから利益を汲み取ろうとする人物であった。自分のこと、自分の利益しか考えていないという点で、点燈夫以外のこの五人は、エルランと同種の人間である。

この六つの星の住人は、地球の「大人」と同質なのであるから、王子を地球で彼らと会わせることもできた。しかし、物語は、この六つのタイプの人間と王子を地球で出会うようにしなかったことで、「大人」の孤立、他者の不在を浮き彫りにすることになっており、王子の旅を宇宙レベルのものにすることにもなっている。また、因果関係によって物語が展開するということにはなっていないので、王子の内面の変化を考慮しなければ、彼らの訪問の順序を入れ替えることも可能である。各星の間でのストーリーの展開の面白さはないが、各人物の滑稽な面が浮き彫りになる中、王子の内面の変化が徐々に準備されて行く。これらの「大人」が紹介されるこの六つ星は、キツネ、王子、飛行士の世界と対立する形を取っており、立体的構造になっている。

この作品では、作中人物は、スタンダール(1783－1842)やドストエフスキー(1821－1881)の小説の作中人物の個性的で複雑な性格は持っていない。ただ、この作品には、教養小説的側面が存在する。王子の内面の変化、それに対する飛行士の変化が物語られることになるのである。

王子は、友人を求める旅で、地球でキツネと会う前に、地理学者との話で、自分の星に置いて来たバラが「はかない」ことを知り、「ほくの花は、はかないのか。世間から自分を守るためのものとしては四つのトゲしか持っていない！それなのに、ほくは、あの花だけにしてほくの

星を出て来てしまった！」¹⁷⁾ と思い、初めてあの花が懐かしくなる。キツネの教えを受ける素地ができたことになる。地理学者は、この点で、王子の開眼を準備する役割を果たしている。また、星の数を数えることに没頭している実業家に対して、王子は、「ぼくが火山と花を持つということは、火山にも花にも役に立つということになるんだよ。けど、君は、星の役に立ちゃいないね」¹⁸⁾ と言う。この点においても、王子は、キツネの教えを受け入れる準備ができていた。ところが、王子は、地球に着いて、キツネと会う前に、五千本のバラを見て、「ぼくは、他に類のない花を一つ持っていると思っていた。それなのに、ぼくは、ありきたりの花を一つ持っているだけなのだ。あの花と、火山三つ、そのうちの一つはいつまでも火が消えたままかもしれない、これでは、ぼくは、偉い王子じゃないじゃないか」¹⁹⁾ と考えて泣き、変だ、奇妙だと思った、所有欲の塊である実業家や人から崇拜されることしか考えていないうぬぼれ屋といった「大人」に近づいたが、キツネのお蔭で、彼は、本物の「子供」になる。それは、探していた「宝」を発見するということでもある。

王子は、キツネと出会い、「飼いならすこと」すなわち「絆を築くこと」が重要であることを教わる。「そうだよ、君は、ぼくにとって、まだ十万の小さな男の子とすごく似ている一人の小さな男の子にすぎないんだよ。だから、ぼくには、君は必要じゃない。それに、君も、ぼくが必要じゃない。ぼくも、君にとって、十万匹のキツネと似ている一匹のキツネにすぎないんだ。けど、君がぼくを飼いならしたら、ぼくたちは、互いに相手が必要になる。君は、ぼくにとって世界でたった一人の男の子になるし、ぼくは、君にとって世界でたった一匹のキツネになるんだよ」²⁰⁾ さらに、キツネは、王子に、物事は「飼いならすこと」によってしか知ることにはできないこと、「飼いならす」には忍耐強くあることが必要であること、習慣の重要性、「飼いならしたものの」には責任があることを教える。

キツネが教えることは、点燈夫以外の五つの星の住人の生き方とは逆のものである。点燈夫は、自分のことしか考えていないということはないのであったが、自分の意思で他者に働き掛け他者を「飼いならす」ということはなかった。点燈夫は、五つの星の住人からキツネの教えへと移行する橋渡しの役割を果たしているのである。

キツネは、「飼いならすこと」によって外界に変化が生じ、輝かしいものに見えると言う。「それから、見てごらん！向こうにある小麦畑が見えるかい？ぼくは、パンは食べない。ぼくには、小麦は不要なものなんだ。小麦畑を見ても、ぼくは、何も思い出さない。それに、あれは、陰気な感じがするよ！けど、君の髪は、金色だ。それで、君がぼくを飼いならしたら、あれが、素敵に見えるようになるよ！金色の小麦は、ぼくに君を思い出させるようになるんだ。それに、ぼくは、小麦にかかる風の音が好きになるよ」²¹⁾ 「飼いならす」ということが、内面に変化を生じさせ、さらに外界を変容させるのである。そして、キツネは、王子に「物事は、心でしかよく見えない。大切なことは目には見えない」²²⁾ という「秘密」を伝授する。

これで、バラの気持ちを見抜けなかった王子も、飛行士が描いた箱の中にヒツジを見ること

ができるようになったわけである。ボアの話も、この「秘密」に繋がる導入部であった。ただ、飛行士が飛行機を修理していることに対する気配りのなさは、どういうことなのであろうか。飛行士の心が読めないはずはないのである。わがままなのであろうか。そうではなく、それは、「子供」の心を忘れて、精神よりも肉体を重視している飛行士の姿勢に共感できないためであると見なすことができる。

ところが、飛行士にも、変化が訪れる。

飛行士は、王子とともに砂漠で井戸を探している時、砂漠が美しいのはどこかに井戸を隠しているためであること、昔家じゅうが美しい魔法にかかったように素敵だったのはその家が宝を隠しているという言い伝えのせいだったことを、王子によって知る²³⁾。肉体のことばかり気に掛けていた飛行士も、別の面が見えるようになった。飛行士は、王子と一体化したのである。そして、彼らは、砂漠で「村にあるみたいな井戸」を見つけ、その水を飲む。『人間の土地』では、リビア砂漠で不時着し、三日間水を探し続けて出会ったベドウィン人から貰った水について、「あなたは、生命に必要であるというのではなかった。生命そのものだった。[……]あなたの恵みによって、ほくたちの内部で、ほくたちの心の涸れた泉がすべて、水を噴き出し始める」²⁴⁾と書き、水が精神に働き掛けたことを明らかにしているが、その水もただ単に肉体に作用するだけの水ではなかった。それを飲んだ後、飛行士の目には、砂漠は変容していた。「夜明けの砂地は、蜜の色をしています。ほくは、その蜜の色によっても、幸せな気持ちになっていました。苦勞する必要などなかったのです」²⁵⁾彼の内面の変化と対応するように、飛行機の故障も直るのだった。そして、飛行士にとって、王子は、かけがえのない存在になっていた。王子がキツネを「飼いならした」ように、王子は、飛行士を「飼いならした」わけである。

王子は、キツネから「飼いならしたもの」には責任を持つべきだということを教わったので、自分の星に戻る決心をしている。王子は、心の目で見えるようになった時、自分がバラを「飼いならしていた」ことに気づいたのである。別れを惜しむ飛行士に、王子は、贈り物として笑い声を贈ると言う。「夜、君が空を眺める時だよ、いいかい、ほくは星たちの一つに住んでいて、星たちの一つで笑うからね、その時は、君にとって、星たちが皆笑っているみたいになるんだよ。君は、笑うことができる星を持つことになるんだ！」²⁶⁾そして、王子は、自分は飛行士と一緒に井戸の水を飲んだ時のことを思い出すと言う。「ほくも、星たちを見るよ。星たちは皆、錆びた滑車のついた井戸になるんだ。星たちは皆、ほくに水を注いでくれるよ……」²⁷⁾「飼いならすこと」で輝くのは、キツネにとっては小麦畑だったが、王子と飛行士にとっては宇宙全体になっている。

Ⅳ. 「内的空間」と「極」

次は、このような目に見えないものへの志向は、彼の他の作品においても問題になっている

のかという問題を検討したい。

『人間の土地』において、「……ぼくたちは、今日、渴きを感じた。そして、ぼくたちが知っていたあの井戸が、内的空間の上で光り輝いていることに、今日になって初めて気づいた」²⁸⁾、『戦う操縦士』においても、「偶然が愛を目覚めさせる時、その愛によって人間の内ですべてが整えられる。そして、その愛がその人間に内的空間の感情をもたらすのである」²⁹⁾と書かれている。

この「内的空間」は、単なる外部の空間ではなく、他への働き掛けによって人間の内面に生じる空間であり、外界を彩ることにもなる。人は、他の事物や人間に対し行動を起こすことによって「飼いならし」たら、「絆」ができ、その内面に「内的空間」が生じることになるというわけである。そして、対象が自分から遠く離れた時、「内的空間」は、対象を「極」にする。『星の王子さま』のキツネは、「物事は、心でしかよく見えない。大切なものは目には見えない」と言うが、「内的空間」も「絆」も「極」も、目には見えず、心で見るとしかないのである。

『南方郵便機』において思い出される、「少年時代」の屋敷や庭園は、「極」になりきっていないのであろうが、『人間の土地』と『戦う操縦士』の回想の中の、「子供時代」の城館や庭園は、「極」である。『ある人質への手紙』では、「極」について、「……殆ど現実には存在しなくなった、いくつかの極が随分遠くからこの砂漠を磁化している、思い出の中では生きて存在し続けている子供時代の家が。生きていること以外のことは何も分からない一人の友が」³⁰⁾と書かれている。

『ある人質への手紙』は、『星の王子さま』と同様、アメリカ亡命中に書かれた。サン＝テグジュペリは、第二次世界大戦が勃発すると、操縦可能かどうかという問題に対する、軍医の否定的判断という障害を乗り越えて、33-2 偵察飛行隊に入隊し、偵察飛行に従事していたが、フランスがナチス・ドイツに降伏し占領されたので、1940年8月5日動員解除になる。彼は、フランスを救うためにはアメリカの協力を求める必要があると考えて渡米したのである。

この作品では、三つの微笑みの体験が語られている。一つは、親友のウェルトとソーヌ川のほとりのレストランで昼食を取った時の、一種の祝祭のような幸福な一致の状態である。ウェルトと「ぼく」は、水夫たちをテーブルに招待し、どこの教会かは言えないが、同じ教会の信者として祝杯を上げる。「大切なものは、その時も、うわべは一つの微笑みにすぎなかった。微笑みは、しばしば大切なものなのだ。人は、微笑みによって報いられる。人は、微笑みによって償われる。人は、微笑みによって励まされる。そして、微笑みの質は、人を死ぬことができるようにもするのだ」³¹⁾ 次の微笑みの体験は、スペイン市民戦争の現地ルポルタージュをやっていた時、アナキストの民兵から怪しい者と思われて、地下室に連れて行かれた時のものである。言葉が通じず、彼らと全く自分が隔絶していることを感じて、恐怖といらだちに苛まれていた時、「ぼく」は、見張りの一人がタバコを吸っているのを見る。彼は、タバコを切らしていたので仕草で一本譲ってくれるように頼み、ちょっと微笑みを浮かべた。次の瞬間、すべてが一変する。「……とても驚いたのだが、彼も、唇に微笑みを浮かべたのだ。それは、あた

かも夜が明けたみたいだった。[……]その微笑みが、ぼくを解放してくれたのである。それは、陽が昇ったのと同じくらい、その次に起こる結果において明らかで、後戻りのきかない、決定的な身振りだった。それは、新しい時を開いたのである。何も変わっていないのに、すべてが変わってしまっていた」³²⁾「ぼく」に微笑みかけた若者は、ちょっと前までは一種のおぞましい昆虫のようであったのだが、その素敵な内面を露にしたのだった。それに釣られて、他の民兵も、人間に戻り、微笑みの国に入ったのである。もう一つは、サハラ砂漠において救助隊員と遭難者の間で交わされる微笑みである。「ぼくは、ぼくが遭難者であった時は救助隊員たちの微笑を思い出すし、ぼくが救助隊員であった時は遭難者たちの微笑を思い出す、そこにいる時自分がとても幸福であることを感じていた一つの祖国を思い出すように。本当の喜びは、会食者の喜びだ。救助活動は、この喜びを感じるための機会にすぎなかった。水は、まず何よりも人間の善意の贈り物でないなら、人を魅了する力はない」³³⁾

この三つの微笑みの体験は、同じ教会の信者のように結び合わされ、ともに生きることであり、差異故に相手を否定するということはない。この文章は、自分と異なる者を受け入れる姿勢を示しており、自分と似たものにしか敬意を払わないナチ党員を批判している。また、自分と意見を同じくしないものは敵と見なし互いに相手を否定し合う、ヴィシー派やド・ゴール派への思いも、そこに読み取ることができる。

このような微笑みの体験は、他者と「絆」を築き「極」を生み出すという点で、「飼いなすこと」と同質のものであった。どちらの場合も、「極」を意識して生きることが、生きる力を与えるようになっている。

ところで、『ある人質への手紙』及び『星の王子さま』と同様、アメリカ亡命中に書かれた『戦う操縦士』で、語り手は、アラスで一齐射撃を受けた時のことを回想して、次のように書いている。「あの対空砲火が、殻を砕いてくれたのだ。今日一日ずっと、ぼくは、たぶん自分の中に住まいを準備していたのだろう。今まで、ぼくは、怒りっぽい管理人にすぎなかった。個人は、そのようなものだ。しかし、「人間」が、現われた。全く簡単に、ぼくの代わりに、ぼくの中に「人間」が住みついた。「人間」は、ばらばらになっている群集を見詰めた。そして、「人間」の目に入ったのは、一つの国民だ。彼の国の国民だ。「人間」が、この国民とぼくの共通の尺度なのだ」³⁴⁾ ここにおいて、明らかに他者との隔絶が否定されている。『人間の土地』には、リビア砂漠で自分を救ってくれたベドウィン人についての文章に、「君は、最愛の兄弟である。そして、今度は、ぼくが、あらゆる人間の中に君を認めるだろう」³⁵⁾ という、「総合」への志向が窺われるが、これが、ここにおいて深化されている。

サン＝テグジュペリは、自分の感覚、思考で自分の世界観を築こうしたのであり、信仰を持つとしたのではないし、『手帖Ⅰ』においては、「……キリスト教は、古代ローマの世界では、何もののをも妨げることがなかった。今日では、ぼくが執着する権利がある、思想上のいくつかの事項と対立するようになっている」³⁶⁾ と書いているが、ここでは、「ぼくの文明は、キリス

ト教の諸価値の継承者である」³⁷⁾ という立場を取るに至っている。キリスト教の教義と重なるものを持つ、一つの思想に達している。他者と断絶した「個人」のうちに神性を宿した「人間」が入って来て他者延いては国民と「絆」で結ばれ、それ故に犠牲の行為も可能になるというものである。これは、「飼いならすこと」とどのような関係にあるのだろうか。

「飼いならすこと」は、「絆を築くこと」であり、友情、恋愛が成立するということであるので、飼いならされないものは排除されることになり、「統合」を重視する上記の思想は、一見「飼いならすこと」と対立するように見える。しかし、上記の文章の「国民」は、そこには人類的な普遍性への志向が存在しているものの、フランス国民を意味していることに注目しなければならない。サン＝テグジュペリは、1942年11月30日の公開状「フランス人への手紙」においても、政治的主張、党派を超えて、団結するよう同胞に訴えている。

『夜間飛行』、『人間の土地』において、責任、犠牲、献身が称揚されているが、『戦う操縦士』においては、それは、一層強調されている。『戦う操縦士』には、重要なのは、肉体の生、肉体の快楽ではなく、行動、関係であるという主張が存在する。「人間」に課されるのは、自分が属しているものだけである。「人間」は、死んでも、それから引き離されることはない、それと一つになっている。「人間」は、自分を失うことはない、自分を見出すのである」³⁸⁾ サン＝テグジュペリは、『ある人質への手紙』においても、旅について「大切なことは、帰ることを目指して生きることである」³⁹⁾ と書き、フランスを「抽象的な女神でも歴史学者の概念でもなく、ぼくが依拠する一つの肉体、ぼくを支配する絆の網、ぼくの心の傾向を築く極の総体」⁴⁰⁾ と説明している。

サン＝テグジュペリは、行動と言葉の一致した生を生きることを目指し、彼を批判したヴィシー派やド・ゴール派のように祖国のことを語るだけでなく、「極」であるフランスの解放を求めて戦うために北アフリカの原隊33-2偵察飛行部隊に戻ろうとする。彼は、運動のかいあって、原隊復帰を許可されたが、2度目の偵察飛行の折に着陸に失敗して飛行機の一部を破損させ、操縦許可を取り消される。飛行士としては高齢であること、度重なる飛行機事故の後遺症、高名な作家であることなどのために再度操縦を許可されるのは困難なことであったが、自分の意思を通すために倦むことなく努力し、5回を限度に偵察飛行を許可されることになる。ところが、彼は、5回を超えても偵察飛行を続け、1944年7月31日9回目の偵察飛行の時、帰投しなかった。彼は、自分の思想を実践したのである。

このことに注目すると、「総合」を重視する上記の思想は、「飼いならすこと」や「微笑みの体験」と同質のものであることが見えて来る。

V. 王子はどうなったのか

サン＝テグジュペリが『戦う操縦士』や『ある人質への手紙』で書いたことを実践したように、

『星の王子さま』で、王子は、これらの作品の主張を実行する。「飼いならした」バラに対する責任を果たすために、自分の命を賭けても自分の星に帰って行こうとするのである。

それでは、王子はどうなったのであろうか。

王子自身の言葉によれば、毒ヘビに咬まれ、自分の肉体は残して、自分の星に帰るつもりのようなのである。自分の星を出た時は、渡り鳥を使ったが、帰る時はそうはいかないらしい。彼は、「遠すぎるんだよ。ぼくは、この体を持って帰ることはできないよ。重すぎるんだもの」⁴¹⁾と言う。語り手の飛行士が最後に見た王子は、次のようなものであった。「王子さまの足首のそばで、黄色い光が、きらりと光っただけでした。王子さまは、わずかの間、体を動かしませんでした。叫び声を上げたりしませんでした。王子さまは、一本の木が倒れるようにゆっくりと倒れました。砂のせいで、音はしませんでした」⁴²⁾しかし、毒ヘビが王子が咬んだことも、王子が絶命したことも、明記されていない。そして、語り手は、「けど、王子さまが自分の星に帰ったことはちゃんと分かっています。というのは、夜が明けた時、王子さまの体が見つからなかったからです。それほど重い体ではなかったのです」⁴³⁾と言う。ただ、生きて自分の星に帰ったとは明言しておらず、この文章においては、王子の体は亡骸を意味しているようにも読み取れる。ところが、彼は、あたかも王子が自分の星に帰って生きていると思っているように語り、地球に戻って来た王子に会ったら知らせてくれと言う。バラも枯れずに永遠に生きていると思っているかのようである。最後には子供の心を取り戻し王子とほぼ一致するところまで行った飛行士は、「けど、羊がその花を食べたら、その人にとって突然星が皆消えてしまうようなものじゃないか」⁴⁴⁾と言った王子と同様に考えて、もし王子が死んでしまったということがはっきりしたら、飛行士に対して星はもう笑わなくなるので、王子から貰った「贈り物」を失ってしまわないためにも、そう思い込む必要があるのであろう。

それにしても、王子は、飛行士に「死んだように見えるだろうけど、そうじゃないんだよ」⁴⁴⁾と言ったが、これは何を意味するのだろうか。王子が、別世界からやって来て自分が元いたところに戻って行くこと、犠牲の行為、亡骸が見当たらないことなどでイエス・キリストと共通していることに注目し、この言葉は「復活」を意味すると見なすのか。しかし、この見方を確かなものにする材料は作中に存在しない。それでは、「転生」したのか。種子として王子の星にやって来たバラは、元いたところの話をしようとして、嘘をついたことになっており、他の世界は知らないことになっている⁴⁴⁾。「転生」の考え方も、作中には存在しない。それでは、王子は死んで、その肉体は分解したのか。無に帰したのか。或いは、彼は、霊界に入ったのか。それとも、飛行士は、幻を見たのであろうか。サン＝テグジュペリがその夢の中から王子を生み出したように、王子は飛行士の夢の産物なのか。いや、そうではなく、王子は、現し身で自分の星に帰ったのかもしれない。王子が毒ヘビに咬まれたことが事実であるとしても、そのことは必ずしも王子が死んだことを意味しないのではないか。この作品では、王子は、自分の星からは渡り鳥の力を借りて出発し、六つの星巡りでは、空中を歩くように星と星の間を移

動しているようであるし、地球にはあたかも2階から飛び降りるかのように落ちて来たのであり、現実世界の法則は適応されていない。語り手が合理的な説明をしていないところも多いのである。それで、王子が現し身で自分の星に帰った可能性もあると考える余地も、この作品には残されている。ただ、読者は、王子の生存を願う一方、王子の肉体が生きているということがはっきりすることは、自分の命を犠牲にしても自分のバラがいる星に帰ろうという姿勢の輝きがくすむことになることも理解できるであろう。

王子がどうなったかについては、色々と解釈を試みることはできても、それだけが正しいものとして証明する材料が作中には存在しない。ただ、言えることは、王子の孤独で純粋なイメージと、自分の死と引き換えにしても自分の「飼いならしたものの」のもとに戻ろうとする彼の姿勢が、一つのいとおしいものとして読者の心に残るようになっていくということである。王子がどうなったかを明確にすることができないようになっていくことが、そのようなイメージを一層鮮明にする機能を果たしている。

Ⅵ. おわりに

以上検討したように、『星の王子さま』は、内容においては、この作品よりも前に書かれた作品の諸要素や彼の伝記的事実を多様に含み、形式の面では、虚構性に富む作品になっている。

この本は、語り手が希望したにもかかわらず、「むかしむかしあるところに……」といったおとぎ話の形式では語られなかった⁴⁶⁾。謎の部分が残るようにして神秘的にしながらも、本当らしくするための説明も行なわれている。対象を固定的に捉え関係を間接的にしその大小で評価をすることにもなる数字を使うことを嫌いながらも、大人が分かるようにするために数字を多用しているのは大人への皮肉となっている。ということは、この本は、大人のための本でもあるのである。『星の王子さま』は、出版社からクリスマス用の童話を執筆依頼され、書かれることになったのであるが、結果的に、大人が「子供」の心を忘れないための本、「子供」の心を忘れた大人が「子供」の心を思い出すための本でもあるとすることができるであろう。

ただ、『星の王子さま』において、「子供」には、好奇心旺盛でしつこく質問を繰り返すとか空想の世界を好むといった、子供の一般的属性が存在しているものの、責任を持つことの重要性とか献身などむしろ大人の精神と言えるものを受け入れる王子は、子供らしくない面も持っている。王子は、「星は、人によって違った意味を持つんだよ。旅をする人にとっては、星は、ガイドだね。また、星が小さな光にすぎない人もいる。学者たちの中には、星を研究の課題にしている人もいる。あの実業家にとっては、お金だった。けど、これらの星は、みんな黙っているよ。君は、誰も持たないような星を持つことになるんだ……」⁴⁷⁾ と言うが、一般に、子供が、言葉が持つコノテーションの多様性を意識することはないであろう。この作品における「子供」とは、一種理想的な子供である。近代市民社会、産業が発達した大量消費社会で、自

分の利益を追求するばかりで利益を離れた他者との関係を持たない人々が「大人」であり、「子供」は、他者に対する無償の行為によって自己の内面に「内的空間」を生じさせ、「絆」を築き、それによって生じた「極」に心に向け、責任のある献身的行動ができる存在であった。

『星の王子さま』では、サン＝テグジュペリが自分の「子供時代」から離れることによって失ったものを飛行機という「現代的」道具を使って回復する試みの中で獲得した生き方が、「子供」の中に形象化されている。キツネが、「飼いなすこと」を、「あまりにも忘れられていることだよ」と断っているように、彼の教えは、新しいものではない。それは、一人の人間の歴史では「子供時代」に、人類の歴史では、近代市民社会、現代産業社会よりも前の「前近代的」社会に回帰したいという願いの中から誕生したものであった。

[注]

- 1) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes II*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 233.
- 2) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes I*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 41.
- 3) Ibid., p. 46.
- 4) Ibid., p. 53.
- 5) Ibid., p. 52.
- 6) Ibid., p. 152.
- 7) Ibid., p. 159.
- 8) Ibid., pp. 166 – 167.
- 9) Ibid., p. 200 – 201.
- 10) Ibid., p. 263.
- 11) Ibid., p. 199.
- 12) Ibid., p. 207.
- 13) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes II*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 158.
- 14) Ibid., p. 183.
- 15) Ibid., p. 130.
- 16) Ibid., p. 278.
- 17) Ibid., p. 282.
- 18) Ibid., p. 275.
- 19) Ibid., p. 292.
- 20) Ibid., p. 294.
- 21) Ibid., p. 295.
- 22) Ibid., p. 298.
- 23) Ibid., pp. 303 – 304.
- 24) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes I*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 268.
- 25) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes II*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 307.
- 26) Ibid., p. 313.

- 27) Ibid., p. 315.
- 28) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes I*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 215.
- 29) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes II*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 160.
- 30) Ibid., p. 93.
- 31) Ibid., p. 97.
- 32) Ibid., p. 99.
- 33) Ibid., p. 100.
- 34) Ibid., p. 215.
- 35) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes I*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 268.
- 36) Ibid., p. 478.
- 37) Antoine de Saint-Exupéry, *Œuvres complètes II*, Gallimard (Pléiade), France, 1999, p. 217.
- 38) Ibid., p. 191.
- 39) Ibid., p. 92.
- 40) Ibid., p. 94.
- 41) Ibid., p. 314.
- 42) Ibid., pp. 316 – 317.
- 43) Ibid., p. 256.
- 44) Ibid., p. 314.
- 45) Ibid., p. 258 – 259.
- 46) Ibid., p. 246.
- 47) Ibid., p. 313.

[主要参考文献]

- ・ Yves Le Hir, *Fantaisie et Mystique dans le Petit Prince de Saint-Exupéry*, Librairie Nizet, France, 1954.
- ・ Jean Huguet, *Saint-Exupéry ou l'enseignement du désert*, La Colombe, France, 1956.
- ・ Yves Monin, *L'Ésotérisme du Petit Prince de Saint-Exupéry*, Éditions A. -G. Nizet, France, 1987.
- ・ Paul Webster, *Saint-Exupéry Vie et Mort du Petit Prince*, Éditions du Félin, France, 1993.
- ・ Michel Richelmy, *Antoine de Saint-Exupéry*, Éditions Lyonnaises d'Art et d'Histoire, France, 1994.
- ・ John Phillips, *Au revoir Saint-Ex*, Gallimard, France, 1994.
- ・ Alain Vircondelet, *Antoine de Saint-Exupéry*, Éditions Julliard, France, 1994.
- ・ Jules Roy, *Saint-Exupéry*, La Renaissance du Livre, France, 1998.
- ・ Emmanuel Chadeau, *Saint-Exupéry*, Perrin, France, 2000.
- ・ 塚崎幹夫、『星の王子さまの世界』、中央公論社、1982
- ・ 山崎庸一郎、『星の王子さまの秘密』、彌生書房、1984
- ・ 稲垣直樹、『サン＝テグジュペリ 人と思想』、清水書院、1993
- ・ 稲垣直樹、『サドから『星の王子さま』へ』、丸善株式会社、1993
- ・ 矢幡洋、『「星の王子さま」の心理学』、大和書房、1995
- ・ ルドルフ・プロット、『「星の王子さま」と聖書』、パロル舎、1996
- ・ 柳沢淑枝、『こころで読む「星の王子さま」』、成甲書房、2000
- ・ 山崎庸一郎、『「星の王子さま」のひと』、新潮社、2000

- ・ 渡邊健一、『星の王子さまの幸福論』、扶桑社、2000
- ・ 山崎庸一郎古稀記念論文集刊行委員会、『友情の微笑み』、みすず書房、2000
- ・ 『ユリイカ 7月号 特集サン＝テグジュペリ』、青土社、2000